

令和四年十二月一日(木)

兼題『小春』『小春日』、席題『旅』

急に冬らしい寒い午後、日本倶楽部にて開催。

新田 ゆふき

月蝕の青き猫の目秋の闇

何の花と幼なに問はる帰り花

小春日や小道に迷ひ池の縁

銭湯に脱ぐ旅上着日の短か

ちるといふ音の重なる落ち葉かな

中村 晃也

旅先の名残の紅葉惜しみけり

旅果ての海辺の宿の雪囲い

駅伝のゴールを目指すひとり旅

江ノ電の窓に小春の海がある

小春日に思い立ちての旅心

高橋 由紀子

我が星の冬の月食む不思議かな

小菊抱え人訪ふ媼の小さき背よ

小春日や本日オープンカフェの旗

旅の連れ逝きて独りの蟹の鍋

野外フェス地が沸き空に鷹くるり

長尾 進一郎

南天の実の赤々と夕間暮れ

今日の業(わざ)五秒で終へし九州場所

舞ふ枯葉せめて自然に帰りたし

ひと駅を歩きたくなる小春かな

旅支度現地の雪のニュー入見る

首藤 しずを

しぐれゆく今朝や山頭火の旅も

小春日の猿となりて松葉摘

小春日の鏡の水面浮子沈む

表情を消して冬木の立ち尽くす

賑はひの声に更けゆく三の酉

宮原 凧

小春日や煮つけ持ち寄る魔女の会

地囃に追ふ旅は遙かに霜月夜

過ぎ逝けり吊り革越しの秋の暮れ

冬木立一人に一つ影法師

冬はじめ紅茶ポットと砂時計

大津 そうかい

冬銀河伊能忠敬蝦夷の旅

地下鉄へどつと一団大熊手

小春日や長き影曳く車椅子

休業の近き山小屋冬紅葉

初恋や一輛列車枯野行く

浜口 須美子

神無月母百年の幕引けり

どこかしら似て通夜の客星が飛ぶ

小春日に母逝く画面は早送り

遺言は供華かすみ草十月尽

病床の母が指さす秋の蝶

志村 良知

小春日や柿の木坂の音楽堂

『田園』の余韻に歩く夕時雨

侘助を隔て隣家と長話

時雨るや戀は哀しと『冬の旅』

小暗がりななが揺らすか花八手

安藤 晃二

青空に爆音眠し小春かな

雪吊りのととのひし庭静かなり

納骨旅列車駆け抜く紅葉かな

岬より鳥海はるか冬の海

取り取りの枯れ葉の浮きて手水かな

内藤 まりこ

小春日や満艦飾の洗濯もの

あけび熟れ口を開けたる真昼かな

旅に出て戻りし庭に返り花

吊るし柿物干し竿の隅を占め

朝の陽に満天星紅葉朱に透けて

森田 元斐

三代の願ひ一つに七五三

小春日や一日別れの下校門

枯れ菊や湖上さまよふ布武の夢

求道の千年の旅冬の山

千年の比叡の楠の日向ぼこ

松田 一文字

おでん煮る旅の土産の出汁昆布

夕陽中糸ひくやうに散る紅葉

小春日の満席昼のカフエテラス

秋うらら天突く白き水柱

境内を黄色に染めて大いちやう

西川 知世

小春日やシール数多の旅鞆

枯園や樹下にパイプの椅子並べ

霜月の窓を曇らせ豆を煮る

横抱きにマネキン運ぶ街小春

思ひ草も裾野の風も枯れ尽くす

次回は令和五年一月五日（木）、

日本倶楽部にて開催

兼題は新田ゆふきさん出題の冬の季語「餅」（食べる餅一切）、席題は西川知世さん出題の「日」です。なお、「鏡餅」は正月の季語になり、含まない。

季語を学ぶ

初学にかえって

西川 知世

次回の句会は、一月五日で松の内、まだ屠蘇気分  
の抜けない新年句会となり楽しみ。歳時記の話  
すると、歳時記には、春・夏・秋・冬・新年と季  
が五つあり、季節ごとに分冊になっているもので  
は、五冊。新年の歳時記は、他に比べて薄い  
が、歳時記ごとに趣向を凝らし一年間の行事や祭事一  
覧や二十四節気・七十二候を加えて、編者の俳句  
論、季語論など、工夫がある。近年では、忘れ去  
られそうな季語もあり、若い人と句会をすると世  
代間の情報交換の格好の材料となる。出身地の違  
う人とはお国自慢が始まる。

さて、兼題の「餅」は年の暮につく餅で、同時に  
新年用の鏡餅もつくがそれらとは一線を画して、  
丸餅、切り餅、欠き餅など、庶民の忙しい生活を  
支えた食べ物としての冬の季語である。

餅の膨らみ俄かにはげし友来るか

加藤楸邨

選句せり餅徴けづる妻の辺に

石田波郷

未来ひとつひとつに餅焼け膨れけり

大野林火

膨れんとして膨れざる餅あはれ

能村登四郎

男の手剛く哀しく餅焦がす

鷺尾七菜子

夜の餅にすこしつめたき母の顔

飯田龍太

餅焦げし匂ひ洩らして灯を洩らさず

野沢節子

人悼むここに餅を焦がしをり

宮澤きぬ子